映画の小箱

トラウマから言葉を失った少女が母親と旅に出る。下町の人々との交感で見つけた、かけがえのない伝達手段——それが音楽だった。

『エイミー』

だれもが自分を探している…言葉を超えた魂のハーモニー

金丸弘美＝文
text by Hiromi Kanamaru

ある著名な音楽家に、「どうやって曲を作るのか」と尋ねたことがある。答えは明瞭だった。「嬉しくなれば、だれでも自然に口ずさみたくなるだろう。それが、音楽さ」。

音楽がいつも人の心をとらえて離さないのは、生のエモーションを宿しているからだ。音楽のもつ素晴らしさと躍動と力、魂のリズム。言葉を超えたコミュニケーション。

エイミーという少女の小さな小さな魂が、音楽によって自分を語り始めるとき、だれしもが大きな拍手を送るに違いない。思わず快哉を叫びたくなるような歓喜が体中に溢れ出す、そんな心地よさと爽やかさに満ちている。

エイミー（アラーナ・ディ・ローマ）は、言葉が一切しゃべれない。ロックミュージシャンだった父ウィル（ニック・バーカー）が、演奏中に大雨に遭い、感電死するというアクシデントを目撃してからというもの、言葉を失くしてしまったのだ。エイミーは、母親タニヤ（レイチェル・グリフィス）と、田舎で暮らしている。

そこに児童福祉局の人間がやってくる。エイミーを保護下に置くためだ。しかし、タニヤは児童福祉局の高圧的な態度に我慢ができずに、エイミーを渡す気にはとてもなれない。タニヤは児童福祉局の執拗な訪問から逃れるために、メルボルンの下町に流れ着く。

周りには、一風変わった人が住んでいる。父親が妻に暴力をふるっている家の、車のホイールを盗むのが趣味の少年。いつも近所の住人を怒鳴り散らし、花に水をかけることが日課のおばさん。ギターを持ち出して、自分の曲を歌うロバート（ベン・メンデルソン）。

そんな中で、タニヤとエイミーの暮らしが始まる。言葉のしゃべれない少女と、身構え、他人を寄せ付けないような雰囲気の母親。タニヤは、児童福祉局の目を逃れることもあって、エイミーに、自分がいないときには、一切外に出ないように言い聞かせる。

そんな風変わりな家に住むエイミーに関心をもつものがいた。向かいの家のロバートだ。ロバートは、越してきて以来、家から出ない不思議な少女エイミーが、あるとき歌に反応を示したことに気づく。ロバートは何度かエイミーに歌いかけるうちに、彼女が歌によって自分を語ることができるのを発見するのだ。ロバートはエイミーを公園に散歩に連れて行く。ところが、タニヤが家に戻りエイミーがいないことに騒ぎ立て、誘拐騒動にまで発展してしまう。警察まで出動し、あわや逮捕と

いうときに、エイミーは警官にしがみつき、ロバートの逮捕を食い止めるのだ。

さあ、ここから奇跡が誕生する。タニヤは翌日、エイミーがラジオにあわせて歌っているのを発見し、ロバートの語ったことが嘘ではないと知るのだ。タニヤは昔、面識のあった精神科医を訪ね、エイミーが精神的ショックで言葉を失っていること、それが解ければ、彼女が閉ざした心を開くことを知らされるのである。

ロバートと同様に、もう一人エイミーに一所懸命語りかけたものがいた。ホイール集めの少年だ。彼は、手押しのワゴンにホイールを並べて作ったパーカッションで、彼女を喜ばせたのだった。ふたりはすっかり仲良くなる。

ところが、そんなときに大事件が起こる。タニヤはレストランで仕事をしている間、エイミーをホイール少年の家で預かってもらったのだが、父親が酒に酔って母親を殴り、あろうことかエイミーを外に連れ出したのだ。さあ、大捜査が始まる。タニヤはエイミーを探すために歌い、ロバートも歌い、やがて町の人々も、警察官も歌い出す。それはまるで音叉のように共鳴し始めるのである。まさに、心の、生命の共鳴に変わるのである。

ここに登場するタニヤも、町の住人も、だれしも自分の生き方に決して自信をもち得てはいない。方向も定まらない。ところが、エイミーとの音楽を通したコミュニケーションによって、生命の息吹を取り戻すのである。

この物語はエイミーという少女の、自分を探し出す旅なのだが、実は社会の中で自分を見失った大人たちが、純真で無垢な少女の魂と歌によって、生命の歓喜にたどり着く話でもあるのだ。エイミーの微笑に触れた時、だれしも歌を口ずさみたくなるに違いない。♪

『エイミー』Amy
(1997年　オーストラリア映画　パルコ配給)
監督＝ナディア・タス
出演＝アラーナ・ディ・ローマ／レイチェル・グリフィス／ベン・メンデルソン／ニック・パーカー／ケリー・アームストロングほか
(シネスイッチ銀座にて今秋公開予定)